

# 父親不在を埋めるもの

宇田 朋子

## 1. 父親が及ぼす影響力

家族の中で、父親は精神的、経済的な支柱である。それは、現代社会においてそうである以上に、エリザベス・ギヤスケルが作品で描いた時代においては余計に、父親が家族の中で果たす役割は大きく、重い責任のあるものであったはずである。特に、『メアリ・バートン』の主人公メアリの生家バートン家、『シルヴィアの恋人たち』の主人公シルヴィアの生家ロブソン家は、いずれも父親の跡を継ぐべき息子はいない。従って、一家の大黒柱としての父親の果たす役割は、この両家ではより大きなものになるのは必然である。

『メアリ・バートン』、『シルヴィアの恋人たち』といった、ギヤスケルの代表作の中で、家庭の中で父親に与えられている役割と、母親に与えられている役割を比較してみると、ギヤスケルが描こうとした「父親のあるべき姿」が見えてくる。

まず父親は、家族と外の社会とのパイプ役となる。仕事を通じて人間関係を広げ、社会との関わりを持つ。それに対し、母親は家庭とご近所という極狭い人間関係の中で生活している。『シルヴィアの恋人たち』の父ダニエルは、捕鯨船に乗っていた過去を持ち、現在は農場を営んでいる。第4章でフィリップと話をする場面も、話題や政治や強制徴兵の事が中心となる。だが、フィリップの叔母であるシルヴィアの母ベルは、そのような夫の話には興味はない。シルヴィアが赤いコート用の生地を買ってきてしまったこと、夫が長い航海に出ている間に亡くなってしまった子供のこと、そして夫ダニエルが飲み過ぎのために健康を害するのではないか、という心配しかしていない。

シルヴィアの結婚相手が話題になる時も、父親は外の世界の人間であるキンレイドが良いと思うが、母親は、自分の身内であるフィリップが、シルヴィアの結婚相

手にはふさわしいと思う。ベルが、自分の親族や親しい近所の人といった極狭い人間関係の中で物事を済ませたいとする様子が明らかである。

『メアリ・バートン』の第1章、及び第2章で描かれているお茶会の場面でも、同じような傾向がみられる。

主人公メアリ・バートンの父親であるジョン・バートンは、義妹エスタを話題にしつつも、工場で働く女性に対する苦言や、工場主のような金持ちへの批判を忘れない。だが、メアリの母親であるミセス・バートンは、ジョンとは異なり、ただ単に自分の妹の行方がわからないことを心配しているだけで、エスタと同じような環境にいる他の女工にはあまり関心がないようである。しかも、エスタに対する心労は、ミセス・バートンがお産に耐えうるだけの体力を彼女から奪っていったほどである。

妹が家出をし、行方がわからなくなってしまったことを、自分があまりにも心配しすぎている、ということは、ミセス・バートン自身わかっていた。お茶会に招かれたアリス・ウィルソンが、エスタを思い出させるような、その場にふさわしくない挨拶をしてしまい、それを謝るアリスに対して、ミセス・バートンは「ばかなのは私の方ですよ。ただエスタのこと、どこにいるのかもわからなくて、ほんとに心配なんです。」<sup>1</sup>と、告げている。だが、頭ではわかっている、どうにも心配する気持ちを止めることはできない。結局、ミセス・バートンの家族に対する強過ぎる程の愛情が、彼女の命を奪う原因の一つとなったのだ。

次に、父親は仕事を持ち、経済的に家庭を支える。一方、母親は、家事、育児を通して家庭を支える。シルヴィアの父ダニエルは、ケスタを雇って、農場を経営していた。ロブソン家は、贅沢ができるほど豊かというわけではなかったが、それでも一人娘のシルヴィアに、新しいコートを買ってあげられるくらいの余裕ある生活を営んでいた。

一方、母ベルは、家事に非常な自信をもっていた。彼女はカンバーランド出身で、非常にきれい好きで、家事全般に自信をもっていた。そして「実のところ、ベル・ロブソンは、家政の腕前をことごとく自慢していた」<sup>2</sup>のである。

このように、父親は外の仕事、母親は内の仕事、という分業は、当時の一般家庭では普通のことであった。未婚のうちは、針子や店員などの仕事を持って収入を得ていても、結婚したら家庭に入り、家事をすることが女性の仕事であった。

父親と母親、あるいは男性と女性の社会的役割が明確に分かれていた時代、娘が母親の代理をすることは比較的容易であった。また、息子が父親の代わりに一家の大黒柱になることも、世代交代という観点から考えれば、いずれは起こることであった。『メアリ・バートン』では、メアリの母親であるミセス・バートンが亡くなったのは、メアリが13歳の時である。だが、母親が亡くなる前から「自分の料理の腕前にかかなり自信をもって卵を割ったりハムを裏返したりしていた」<sup>3</sup>メアリが、母親が亡くなった後、家事をこなすのに非常な苦勞を強いられるということはなかった。母が亡くなった後、メアリはバートン家の家事一切を取り仕切ることになった。

一方、ウィルスン家では、病弱な母ジェインよりも先に父ジョージが亡くなる。だが、その時にはすでに長男ジェムが工場で働いていて、稼ぎがあった。ジョージの死後、メアリがジェインの様子を伺いに行った時、ジェインはジェムが職工長になったと自慢している。その後、ジェムの発明品が工場主に高く買ってもらえたので、彼は一度に300ポンド以上の金を手に入れることになる。それを、年20ポンドの分割で支払って貰うようにしたことで、ウィルスン家の収入は安定する。1840年頃のロンドンにおける半熟練工の1週間の支出が、4人家族で15シリング程度、熟練工の家庭でも、7人家族で1ポンド程度であった<sup>4</sup>ことを考えると、ジェインとアリス、ジェムの3人家族で、ジェムが工場で働いて得る基本給の他に年収20ポンド上乗せされれば、労働者階級の一家にとって、暮らし向きは豊かになった、と言えるだろう。

更に、娘から見た父は精神的支えであり、父から見た娘は心を和ませ笑顔をもたらす存在である。父親はつつい娘に甘くなる。それに対し、母親は娘を厳しくしつけようとする。『シルヴィアの恋人たち』では、比較的遅くに結婚したダニエルにとって、娘は非常に大切な存在である。コート生地を買いに行った日も、帰りが遅くなったシルヴィアを心配して、外まで様子を見に行く程である。また、シルヴィアがキンレイドを好きになったことに対しても、ダニエルは理解を示す。ダニエルは、自分が文字を読めないため、シルヴィアの教育に対してもあまり熱心とは言えない。フィリップに頼んで、シルヴィアに学問を教えようと熱心なのは、母親の方である。

『メアリ・バートン』でも、ミセス・バートンが亡くなった後、誰に対しても

頑固になったジョンであるが、唯一娘メアリに対してだけは優しい気持ちを忘れない。メアリが16歳になり、仕事を決めなければならなくなった時、ジョンはわざわざ1日仕事を休んでお針子の仕事口を探しに行く。だが、ジョンが回ったところはどこも謝礼金を要求するので、彼はメアリの仕事口を決めることができずに帰ってくる。

その翌日、メアリは自力でミス・シモンズの店に勤め口を決めてくる。それは、2年間は無給で食事も自分持ち、朝は早く夜は仕事次第という大変厳しい条件のものだった。だが、メアリが満足そうにしている様子を見て、ジョンも満足する。娘の意思を尊重する父親らしい愛情が見える場面であり、同時にこの時点ではまだバートン家はそれほど生活に困窮していなかったことがうかがえる。

のちにジョンがマンチェスター代表としてロンドンに行き、議会に工場の雇用状況改善の請願書を提出したが結局拒否されて帰ってきたときも、自分の期待通りに話が進まなかったことで失望し、不機嫌でいたジョンだが、メアリが居眠りをしていた姿について笑顔を取り戻す。娘と二人暮らしであった父親にとって、娘の存在は心安らげるものであった。

## 2. 父親不在がもたらすこと

『メアリ・バートン』、『シルヴィアの恋人たち』では、主人公は共に物語の中で父親を亡くす。父親が亡くなると娘にどのような影響があるのだろうか。

最も深刻なのは経済的な損失である。『メアリ・バートン』では、ジョンは亡くなる前から失業していた。ロンドンに議会請願に行く際、事態が改善されると楽観していたジョンは、それまで時間短縮で働いていた勤め口をさっさとやめてしまっていた。その後、労働者運動にかかわっている者は雇用に不利であることから、結局ジョンは最後まで定職に就くことができない。その間家計を支えるのはメアリのわずかな収入だけでしかない。父親が父親としての役割を果たせなくなった時、一家は食うにも困るような状況に陥ることとなる。

『シルヴィアの恋人たち』では、ダニエルは、強制徴兵隊のだまし討ちにあって捕まった人たちを助けようとして、強制徴兵隊が基地にしていた宿屋を襲う。その際、何気なく「昔みたいに若かったら、こんな集会所なんて打ち壊して火をつけてしまうんだがな」<sup>5</sup>と叫ぶ。それが、暴動をおおった罪だということで、

ダニエルは逮捕され、最終的に絞首刑になってしまう。働き手を失ったロブソン家は、シルヴィアがフィリップと結婚し、ヘイスターズバンク農場を売る、という方法でしか生計を立てる道がなくなるのだ。

さらに、『シルヴィアの恋人たち』の中にはもう一人、父親をなくしたために経済的に不安定な状況に陥る娘がいる。シルヴィアとフィリップの娘、ベラである。フィリップが失踪した後、シルヴィアとベラは、フォスター洋品店に住み続ける理由がなくなってしまう。フィリップがどれくらいの財産を持っているのかも知らないシルヴィアは、フィリップがいなくなった後、どのように過ごしていけばよいのか皆目見当がつかない。唯一、彼女が思いついたのは、ヘイスターズバンク農場に戻ることだけだった。

もし、シルヴィアがヘイスターズバンク農場か、そうでなくてもシルヴィアが思い描いていたような田舎の生活を選択していたら、ベラは、それまでとは全く違う、田舎の貧しい家の娘として育たなければならなかったはずである。いくら幼いとはいえ、父親がいなくなる、という状況が、娘に経済的な困難をもたらすことに変わりはない。

次に、父親の失踪により、娘は精神的な支えを失う。と同時に、父の死が、娘の結婚のきっかけにもつながる。『シルヴィアの恋人たち』では、父親の死、それも罪人として処刑される、という悲劇によって、シルヴィアは完全に判断力を失ってしまう。父ダニエルが逮捕された直後にフィリップから求婚された時は、フィリップのことは兄としか思えないからと言って結婚の申し込みを断ったシルヴィアは、その後ケスタにフィリップとの関係を疑うようなことを言われ、「おまえが憎い」とまで言い放った。しかしダニエルが処刑されて亡くなると、フィリップに頼るしかほかに道はないと思い、フィリップの求婚を受け入れる決意をする。

ダニエルは、キンレイドがシルヴィアと結婚したい、と申し込んだとき、妻ベルがいないことを不安に思ったものの、結婚の約束そのものは認めている。だが、キンレイドの行方が分からなくなった時、彼はキンレイドが死んだと思込み、今度はフィリップとの可能性を妻ベルに示唆する。

しかし、ベルは夫に、「二人を結婚させようと思っているなら、当分先のことになるだろうね」<sup>6</sup>という。シルヴィアがキンレイドに夢中になることを心配し、

キンレイドとの結婚に反対していたベルだが、シルヴィアがキンレイドの死にショックを受け、当分恋をしたいとは思っていない、という気持ちになっていることを理解していたのだ。だから、もし父ダニエルが亡くなる、ということさえなければ、シルヴィアは、キンレイドとの結婚の可能性がどれ位あったかは不明だが、少なくともフィリップとこんなにも急に結婚する羽目には陥らなかったはずなのである。

『メアリ・バートン』では、ジョンが仕事を辞めて稼ぎを失ったときから、バートン家は実質父親不在の状況になっている。そして、そのころからアヘンを使うようになったジョンとメアリの関係は、あまり良好なものではなくなる。もちろん、父に対する愛情が消えることはない。だが、疲れも伴って、つついメアリとジョンが激しく口論するような場面が出てくる。もはやジョンは、メアリにとっての精神的な支えという役目を果たしていない。

そして、『メアリ・バートン』においても、父親の喪失が娘の結婚のきっかけとなる。

ジョンがグラスゴーに仕事で出かける、と言って家を出た後、メアリは非常に不安な気持ちになる。そして、そのような気持ちの中で、自分が本当に愛している人間が、ハリー・カースンではなく、ジェム・ウィルスンであることに気がつく。そして、ジェムがハリー・カースン殺害の嫌疑をかけられて逮捕されてしまったとき、ジェムの無実を信じ、それを証明しようと奔走するのは、ジェムの母ではなく、メアリである。そのことを知ったジェムは、一度は求婚して断られ、メアリを妻にすることを諦めかけていたのだが、やはり自分の結婚相手はメアリしかいないと再認識する。そして、母と一緒にマンチェスターまで帰り、叔母アリスの死を見届け、葬儀を済ませた後、彼はメアリの看病をするためにリバプールに戻る。一つには、ハリー・カースン殺害の真犯人が父である、ということを知っているらしいメアリが、うわごとで何かジョンに不利なことを口走るのではないか、という危惧から、そしてそれよりも、メアリの世話を他人に任せておくのが心配だから、という愛情からである。

いずれの作品においても、父親を失うことが、娘の経済的、精神的な基盤を脅かし、新しい人生へと進みだすきっかけになっている。

### 3. 父親の代わりとなる存在

父親不在となった娘たちだが、その娘たちにとって父親代わりとなる存在が、小説には登場する。それは、父親とほぼ同年代か、それよりも年上の男性キャラクターである。彼らは父親の代わりとして颯爽と登場するわけではない。だが、娘たちにとっては、父親の代わりとして、精神的に、そして時には経済的に、頼りにできる存在なのである。

『シルヴィアの恋人たち』では、ケスタとジェレマイア・フォスターがその役割を果たす。

ケスタはヘイスターズバンク農場の小作人で、メアリが幼い時から父の下で働いてくれていた人物である。ダニエルが亡くなった後、ケスタは自分を抜きにしてシルヴィアがヘイスターズバンク農場を売り払うことを決めてしまったこと、そしてフィリップと結婚する決心を固めたことに対して腹を立てる。ケスタはケスタなりに、今後のことを考えていたのである。そして、自分ひとりで農場を切り盛りして、シルヴィアとベラを養っていこうという心づもりだったのである。

フィリップとケスタの対立は、シルヴィアを取り合う争いである。どちらの男性も、シルヴィアを自分の力で保護したいと考えていた。ケスタはシルヴィアにとっては父親代わりとなるには経済的基盤が弱すぎた。フィリップのほうが、経済的な面では頼りになった。しかし、ケスタはフィリップにはできないこと、つまりシルヴィアの精神的な支えにはなることができた。

シルヴィアがフィリップと結婚してから数週間後、フィリップに頼まれてケスタはシルヴィアに会いに行く。だが、その時の会見は、ぎくしゃくとして、お互いに気詰まりなものであった。フォスター洋品店の経営を手伝う若き実業家の妻となったシルヴィアは、ケスタにとっては今までとは全く別人のシルヴィアのように見えたのだ。そして、気詰まりなまま二人は別れる。

だが、フィリップが失踪し、母親が亡くなった時、シルヴィアの心は硬直したままで、涙を流すことすらできなかった。そのシルヴィアの心を解きほぐすことができたのが、ケスタだったのだ。母の葬儀に参列し、悲しみにくれるケスタの姿を見た瞬間、シルヴィアはそれまでの悲しみをすべて流すかのように号泣する。そして、葬儀の後ケスタを家に呼んで、シルヴィアはフィリップの失踪について、ケスタに相談する。シルヴィアが結婚してケスタと離れて暮らすようになって、

娘時代にキンレイドへの恋心を相談できたのと同じように、ケスタは頼れる相談相手であったのだ。

一方、ジェレマイア・フォスターは、シルヴィアにとって金銭的な支えとなる。母親べつりのベラが、たまたまジェレマイアが持っていた金時計に目を奪われて、彼の方に歩いていこうとしたのがきっかけで、ジェレマイアはシルヴィアとベラ母子に好意を抱く。そして、フィリップがいなくなった後もシルヴィアがフォスター洋品店の裏で住み続けることができるように尽力してくれ、シルヴィアが若くして亡くなった後も、ベラの経済的支えとなり続けてくれるのである。

『メアリー・バートン』のメアリにとって、父親の代わりとなってくれる存在は、ジョブ・リーである。メアリの友人マーガレットの祖父であるジョブは、ジョン・バートンの良き話し相手であると同時に、読書好きで博物学に造詣が深い。『メアリー・バートン』に登場する職工の中では、一番学があると思われる人物である。

ジョンの収入がなくなってバートン家が生活に困った時、そしてジェムのアライバイを立証するためウィルを探しにリバプールに行く、とメアリが決意を語った時、メアリにお金を貸すと申し出るのは、マーガレットである。直接的にはマーガレットが稼いで蓄えていたお金だが、マーガレットの保護者であるジョブがそれを認めたからこそマーガレットも蓄えをメアリに貸すことができたのだ。従って間接的にジョブがメアリに援助したとも考えることができる。食べるものがないだろう、とメアリに食事を勧めてくれるのもジョブである。

ジェムの弁護士の算段を付けてくれたのもジョブであり、それ以前に、気難しい父の話し相手になってほしいとメアリが頼むのもジョブである。初めて会った時には、ジョブが専門用語を駆使してコレクションの説明をする姿に圧倒され、ジョブのことを「占い師ではないのかしら？」と疑っていたメアリだが、物語が進むにつれ、ジョブはメアリにとってかけがえのない相談相手となり、さまざまな教えを乞う相手となるのである。ジョブは、メアリの周りにいる人たちの中で一番知識があって世間を知っている人物であり、いざという時にはまず相談すべき相手である。ジョブはなんでも知っている、とメアリは信じており、頼りにするようになる。

このような父親の代わりとなるようなキャラクターは、物語の中では決して主

役ではない。だが、父親の代わりとなる存在があるからこそ、主人公は父親を失っても、生活を続けていけるのだ。そして、ケスタのように、主人公が若くして亡くなった後も生き続け、主人公の人生を後世に伝えたり、ジェレマイアのように、主人公が亡くなった後もその家族（娘）の保護者として経済的に支援していく者がいる。このように、社会的経験を積み、経済的にもある程度余裕がある年配者が、世間知らずで一人では生きていけない、か弱い主人公を守る影のヒーローとして、物語には存在するのである。

#### 注

この原稿は、2006年10月1日、中央大学多摩キャンパスで開かれた、第18回日本ギヤスケル協会大会において、シンポジウム「ギヤスケル文学の男性キャラクターのあり方」で発表したものを元に、新たに書き直したものである。

1. 『ギヤスケル全集2 メアリ・バートン』直野裕子訳 大阪教育図書 2001年 p.22.
2. 『ギヤスケル全集5 シルヴィアの恋人たち』鈴江璋子訳 大阪教育図書 2003年 p.33.
3. 『メアリ・バートン』 p.21.
4. 角山榮・川北稔編『路地裏の大英帝国』平凡社 1982年 3章参照。
5. 『シルヴィアの恋人たち』 p.227.
6. 『シルヴィアの恋人たち』 p.205.

(聖徳大学短期大学部准教授)

